

## 8. 高大接続事業

高大接続事業の一環として8月に高校生向け「公開講座」、2月に「高校生ワークショップ」を計画し、茨城大学へ進学し、教師を目指す生徒を対象に事業を展開した。さらに、高校生が大学へ入学したときに、高校と大学の学びの接続が円滑になるよう、グループワークを意識的に取り入れ、参加者同士が対話を通して、新たな学びに気づき、自分たちなりに学びを継続できるよう課題を設定した。

### (1) アドミッションセンターとの連携による「公開講座」

公開講座「教職入門～学ぶとは～」を8月23日に県内の高校生37名を教育学部D棟201に迎え大学の講義を体感してもらえるよう実施した。具体的には前期、教職概論を受講してくれていた学生をアシスタントに、教職概論のさわりを体感してもらいました。学生にとっては、講義で獲得した知識や技能を試す場面になり、大きな学びを得たのではないのでしょうか。その学生の力に誘発され、参加してくれた高校生の目が、徐々に変わっていくのがわかりました。

### (2) 本センター主催高大接続事業

3月11日(月)に、「主体的、対話的で深い学びとは」というタイトルで本全学教職センターの主催で行った。3月11日は本県高校生にとって絶妙のタイミングである。県立高校は、学力検査判定会議で生徒はお休み、さらに、翌日は国立大学後期日程試験と学ぶ意味を考えるには格好のときである。そのためか、67名の参加者があった。

今回は、教師を目指す本学学生7名がアシスタントティチャーとして講座に加わった。彼らには、「指導せずに、疑問形で問い直し、彼らに考えさせること」と講座への関わり方を指導した。グループワークで、各班で主体的に学ぶこと、対話的で学ぶこと、それらを体感してもらった。そのうえで、それまで獲得してきた学びがさらに次の学びへと昇華していくのを理解してもらうために「理想の学校づくり」というテーマで各グループからプレゼンテーションを行ってもらった。課題を洗い出し、それらの共通項を探し、具体を抽象化し、対応策を考え出し、そのうえで理想の学校を示すという、論理的な発表になっていた。書く場面で、大学生は、講義で獲得した学びを高校生に試行し、獲得した学びが深まったし、高校生も、明日からの学びへのヒントをつかんだはずである。

### (3) アンケート結果から

両講座とも終了後にアンケートを行ったが、8割以上の高校生が本学への進学意志が高まったと応えてくれた。また、大学で学ぶことが、自分たちの学びにつながったことがうかがえるような記述回答もあった。なにより、大学生をアシスタントティチャーとして参加させたことは、大学生、高校生双方にとって大きな成果があった。参加した大学生からは、講義で学んだことを試すことができたし、その結果、まだまだ学び続けることが大事であると気付いてくれたようである。

【講座の写真から】

